

楽しい商売、不思議な商売はいかが！！

- 対象 小学校3年生 時間：45分
- 実施日と場所 2009年4月21日 松江市立宍道小学校
- 実践者 林 良子
- テーマについて 3年生のはじめは、絵本から読み物へ移行する時期である。教科書単元「きつつきの商売」からの発展として、楽しい本の多い「商売」をテーマとした本を紹介することにより、読み物への関心と読書意欲を持ってほしいと考えた。
- ブックトークの流れ

紹介する本	ポイントになる言葉など
1 森のお店やさん 林原玉枝・文 はらだたけひで・絵 アリス館	<p>みなさんが4月に学習しているのは「きつつきの商売」ですね。みなさんも、何か商売をしてみたいと思ったことがありますか。きょうは、楽しい商売、不思議な商売など、商売に関係する本を紹介します。</p> <p>「きつつきの商売」は、「おとや」でしたね。教科書に載っていたメニューの他にもう一つあります。この本に載っています。(P62を見せる) きつつきだけでなく、いろんな動物がお店を出しています。どんなお店があるのでしょうか。(目次を読み上げ、それぞれの短編の題のカラーページを見せながら話す) たとえば幸福の「おみくじや」を開いたのはたぬき。「ポケットや」は、はりねずみ。「おやおやや」はもぐらが開いた店。これは何のお店でしょうね。(P83、P84を紹介)</p>
2 カドヤ食堂のなぞなぞ 富安陽子さく 宮本忠夫 え 新日本出版社	<p>メニューがあるのは、本当はレストランですよ。でも「カドヤ食堂」のメニューには、まぼろしのメニューと言われて誰も食べているところを見たことがありません。</p> <p>(P3のカドヤ食堂のメニューをカードにして黒板に貼り、どれがまぼろしのメニューかをたずねる) ぼくは、うな井が食べたくて、カドヤのおじさんとともに田んぼに行きます。</p> <p>(P54をカラーコピー。田の番人が出すなぞなぞを子どもたちにも出す) さあ、なぞなぞがとけてうな井が食べられるでしょうか。</p>
3 きつねのスーパーマーケット 小沢 正・作 西川おさむ・絵 金の星社	<p>カドヤ食堂は謎にみちたお店ですが、こちらのスーパーも不思議です。(みちことお店のきつねの紹介をする) きつねが案内した売場を紹介しましょう。(P9の姿が変わるふろおけ、P24のえんとつ、P35のひな人形) みちこが、きつねにいろんなことを聞いていると、きつねは姿を消してしまいました。みちこは、きつねにいろいろ聞きすぎたかなあと考えています。でも、また、このスーパーに行ってみようと思います。みなさんはどうですか。行ってみたいですか。</p>

<p>4 つるばら村のくるみさん 茂市久美子・作 中村悦子・絵 講談社</p>	<p>不思議なお客さまが来る店もあります。(三日月屋とくるみさんを紹介する)では、どんなパンを作っているでしょう。(目次を読み、どれが食べたいか聞く。声があがったパンについて、それがどんなパンなのか本を開いて話す)(作者の茂市久美子がパン屋、はちみつ屋、家具屋、旅館など、お客さまとの交流のある本を書いていることも紹介する)</p>
<p>5 メネッティさんのスパゲッティ ケース・レイブランド・文 カール・ホンランダー・絵 野坂悦子・訳 BL出版</p>	<p>おいしいパンを作ろうとくるみさんはがんばっていますが、メネッティさんはお店を出すのに苦労しました。(裏表紙を先に見せ、表紙に移る。スプリートの町や人々の紹介、メネッティさんの紹介をし、メネッティさんがスパゲッティの店を開いたことや屋台にしたわけを話す)(カラーのさし絵を使いながら、町の人たちの変化を想像させる。P81を読む)メネッティさんのお店は、なぜうまくいったのでしょうかね。</p>
<p>6 魔法を売る店 ウエルズ 作 山主敏子 文 旺文社</p>	<p>メネッティさんの店には誰でも入れますが、よい子しか入ることができない店もあります。魔法の店です。みなさんは?無理?あとがきに、「空想をよく働かせる子も魔法の店に入れることでしょう。」と書いてあります。入ってみたいですか。(P103、P107、P111、P119などのさし絵を紹介する)お代はいりませんよ。店の奥に入ると…(P134の絵を見せる)恐くなってきましたね。この辺でやめておきましょう。(作者ウエルズを紹介する。「透明人間」を考えたことなど)</p>
<p>7 大どろぼうホッツェンプロッツ プロイスラー 作 中村浩三 訳 偕成社</p>	<p>みなさんは、どんな商売をしてみたいですか。でも、これにはならないでくださいね。人を困らせる泥棒です。しかも、「大どろぼう」です。(登場人物を拡大コピーで紹介し、カスパールとゼッペルがホッツェンプロッツを追い始めるところまでのあらすじを話す)ふたりの子どもも活躍しますが、泥棒稼業のホッツェンプロッツだって負けてはいません。(シリーズが3冊あることを紹介する)</p>

実践をふりかえって

子どもたちは問いかげによく答え、にぎやかに楽しくブックトークをすすめることができた。一番人気があったのは、「大どろぼうホッツェンプロッツ」。泥棒という設定が、興味を引いたのかもしれない。これは、ハードカバーと文庫版の計6冊用意しておいた。1はやや少なかったが、2, 4, 5, 6, 7は、8割位の子どもが読みたいと答えた。2は読みやすい本である。今後、富安陽子の作品を楽しんでほしいと考えた。4~7は3年生4月ではやや手応えがあるが、今後の読書につながることを期待できる本である。子どもたちの多彩な反応にひきこまれ、4~7はていねいに紹介するつもりだったが、実際には駆足の紹介になってしまった。

「いつも行っている学校の図書館にこんなおもしろい本があるなんてびっくりした。」と伝えてくれた子、「つるばら村シリーズを見つけました。」と言って読んでいる子など、図書館への興味や自分で本を探す楽しさを感じた姿に接し、うれしい手応えを感じた。